上流階級の象徴でもある宮廷で、明治20年(1887)に公式行事として始まったのが「観桜会」で、浜離宮で開催されました。「作品 30」は、その様子が描かれていると考えられます。
「観桜会」はその後大正6年(1917)からは新宿御苑に場所を移し、昭和12年(1937)まで催されました。
あでやかな姿が、桜の花に彩られた作品をどうぞご覧下さい。

28)開化三十六会席　上野　西洋軒
豊原国周　　明治11年(1878)

29)東京名所之内　上野公園地桜花盛之景
歌川広重(三代)　明治13年(1880)

30)皇国貴顕観花之図
楊洲周延　　明治20年(1887)

31)舞踏会　上野櫻花観遊ノ図
楊洲周延　　明治20年(1887)

「花見と戯れ」

明治時代になっても人々は、桜の開花にあわせ上野や墨堤、飛鳥山などの名所へ繰り出して花見を楽しみました。特に上野は江戸時代は寛永寺の境内であったため、鐘や太鼓などの鳴り物は禁止されていましたが、公園となった明治時代には規則も取り払われました。
展示作品では、墨堤で酔って足を滑らせ川に落ちるところを、あたかも河童に足を引っ張られたと風刺したもの、飛鳥山で目隠しをしてふざける中、他人に迷惑をかけ叱られるもの、向島の寺院の桜に登り、また枝を折るなどして警察官に注意されるもの、といった様々な様子が、生き生きと描かれています。

32)東京滑稽名所　隅田堤の満花
歌川広重(三代)　明治16年(1883)

33)東京滑稽名所　飛鳥山目隠の戯れ
歌川広重(三代)　明治16年(1883)

34)東京名所三十六戯撰
向しま蓮華寺
昇斎一景　明治　5年(1872)

「桜の花を描く」

これまで紹介してきた作品の中の桜は、幹のまわりが桃色から赤色で表現された姿をしており、個々の花を描いているものはほとんどなく、当時の人々が桜を木全体で捉えていたことが見て取れます。
これはまず花が開花して木を覆い、その後に葉が芽吹くという、ソメイヨシノの特徴が捉えられており、明治時代の桜の主流がソメイヨシノであったことが判ります。
一方ここで紹介する展示作品では、桜の花を具体的に捉えて描いています。

35)東京花名所　隅田川　八重ざくら
歌川広重(三代)　明治12年(1879)

36)浅草公園遊覧之図
楊洲周延　　明治24年(1891)

「作品 35」では、ソメイヨシノに代表される、一重の五弁の花びらに対し、六枚以上の花弁をつける八重桜の特徴が詳細に描かれています。ソメイヨシノが花びらが一弁ずつ散るのに対して、八重桜は花の房全体が落花します。
また「作品 36」は、五弁の花びらの桜が描かれていますが、若葉もあわせて描かれているところから、山桜が描かれていることが見て取れます。ソメイヨシノより1~2週間遅れて、山桜は若葉が芽吹くのとあわせて開花します。
展示作品の印刷が「四月十日」とあり、山桜の開花の時期に合わせて発行されたのでないかと考えらえます。

ソメイヨシノ

八重桜

おもな参考文献

桜Ⅰ・Ⅱ　ものと人間の文化史　有岡利幸
（財）法政大学出版局　２００７年
桜の来た道　染郷正孝　東京農業大学農業資料室　２０００年
桜 さくら サクラ １００の素顔
（財）東京農業大学出版会　２０００年
日本桜名所百選　野間佐和子　（株）講談社　１９９２年
明治の東京計画　藤森照信　（株）岩波書店　１９８２年
浅草十二階　細馬宏通　青土社　２００１年
江戸っ子と浅草花屋敷　小沢詠美子（株）小学館　２００６年
（公財）東京都公園協会ＨＰほか、各種サイト

「桜が彩る 東京風景」展

会期:2022年２月１日(火) ～ ３月27日(日)

会場:＜ GAS MUSEUM がす資料館＞ガス灯館２階「ギャラリー」

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、2021年度第二回企画展として、2022年２月１日(火)から３月27日(日)までの期間、「桜が彩る 東京風景」展を開催します。

日本人の暮らしと深くかかわってきた桜。明治になると文明開化を彩る花として、街に広がっていきます。銀座煉瓦街の街路樹の桜をはじめ、多くの新たな名所が桜で彩られ、その風景は錦絵にも描かれました。また時代は変わっても、人々の桜を愛でる心は変わっていません。錦絵でも、貴婦人が華やかな春を楽しむ姿や、歌舞音曲に浮かれてハメを外して周りに迷惑かける姿など、思い思いに花見を楽しむ人が描かれています。
桜の花が彩る華やかな東京の街と人々の風景を、ぜひご覧下さい。
コロナ禍で、花見もままならない日々が続いていますが、桜が彩る春の街を楽しむ気持ちを思い起こして、皆様が日常の心を取り戻す一助としていただければ幸いです。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧
【展示解説】　　学芸員　高橋　豊

「桜とは」

現在の私たちが「花」といわれてイメージするのは、「桜の花」を思い浮かべる方が多いのではないかと思います。
中国からの文化がもたらされた奈良時代は梅の花が関心を集め、万葉集では桜の花以上に梅の花が歌に詠まれています。平安時代になると桜の花が愛され、古今和歌集では詠まれた歌の数は逆転します。
その後の王朝文化が花開く中、桜の花を愛でる花見の宴は都の文化の象徴となり、桜の花は「都の花」となってゆきました。

「ソメイヨシノの誕生と広がり」

江戸時代までの桜の楽しみ方は、一本の桜の木を眺める形でした。桜並木も、さまざまな種類の桜を植えることで満開日をすこしずつずらし、順に楽しめるように植えられていました。
江戸随一の桜の名所である上野では、満開の桜を、一ヶ月余りの期間楽しむことができました。
現在の私たちがイメージする桜は、群落の桜がいっせいに咲き、満開となり、散る姿です。このような桜は、弘化年間(1840年代後半)に登場した、ソメイヨシノという品種でないと見ることができません。
ソメイヨシノは、元は一本の桜から挿し木で新たな木を育てるクローン種であるため、全ての木が同じ特徴を備えています。そのためいっせいに開花して一週間ほどで満開となり、一面を桜の花で彩ることとなります。
現在では、開花時期が卒業と入学、入社や転勤などと重なりあうことから、ソメイヨシノは旅立ちや門出の象徴の花となりました。

「銀座煉瓦街と桜」

明治5年(1872)の銀座大火の後、火災に強い街づくりを目指し、T. J. ウォートレスの設計による、煉瓦造りの建屋による街づくりが進められました。
京橋南側より明治6年(1873)には早くも建物が完成し、随時新橋方面へ建設されてゆき、裏通りを含めて完成したのは明治10年(1877)のことでした。
煉瓦街の前を走る通りも、合わせて整備されました。中央を走る車道の両脇には歩道が設けられ、境に敷石がしかれ、車道側の通りに沿って街路樹が植えられました。
街路樹の種類は「桜」「楓」「松」があり、京橋から新橋までの大通りに沿って、約１２mおきに１４８本が植えられ、春の桜、秋の紅葉と、季節ごとに変化が楽しめました。

１)第一大区從京橋新橋迄
煉瓦石造商家蕃昌貴賤薮澤盛景
歌川国輝(二代)　明治　6年(1873)

２)東京名所　京橋之景
歌川芳虎　　明治　8年(1875)

銀座煉瓦街の街路樹のなかでも、特に桜は、開化風景の象徴として多くの作品に取り上げられています。銀座の桜は、桜の花で木の幹全体が覆われているように錦絵で描かれていることから、おそらくソメイヨシノが描かれていると考えられます。そしてソメイヨシノは、錦絵の後押しもあって、明治の開化風俗を象徴する花になっていきます。

3）東京名所　京橋銀座通里煉化石瓦斯燈景ノ図
歌川広重(三代)　明治　7年(1874)

4）東京名所図会　銀座通
歌川広重(三代)　明治18年(1885)

5）東京開華名所図絵之内　新橋通煉瓦造
歌川広重(三代)　年不明

「東京の開化名所と桜」

ここでは、開化東京を象徴する明治の近代的な構築物を、ソメイヨシノとはじめとする桜とともに描いた作品を紹介します。

6）志ん版　十二階図
みの忠　年不明

7）東京名所之内　吾妻橋新築之図
井上安治　明治20年(1887)

【吾妻橋】
明治20年(1887)に改架された吾妻橋は、隅田川に架けられた最初の鉄橋でした。ピン接合のトラス型の橋は、長さ81間(約147m)、幅7間4尺(約14m)、人道と車道が区別されており、開橋式は盛大に催されました。橋にはガス燈が設けられ、入口上部中央には「吾妻橋」とある真鍮製の銘板が掲げられていました。橋際のガス燈とともに桜の咲く姿が描かれ、近代的な構造物を華やかに引き立てています。
吾妻橋も、関東大震災で木製の橋床が焼け落ちてしまい、昭和6年(1931)に現在の橋へ改架されました。

8）東京開華名所図絵之内
筋違萬世橋より駿河台を望む
歌川広重(三代)　年不明

9）東京名所江戸橋郵便局真景
楊堂玉英　明治34年(1901)

【江戸橋郵便局】
明治25年(1892)に江戸橋脇に建てられた、郵便局の姿が描かれています。作品は竣工する前に発行されていますが、かなり正確に建物は描かれています。
建物のまわりに桜の木が何本も並び、とても華やかな街の風景が描かれています。実際、このように桜の木が植えられていたのかは判りませんが、開化東京の街を彩る象徴として、優美な姿が目を引きます。

10）東京名所　愛宕山山上ヨリ海上みはらし
歌川国利　明治23年(1890)

「上野と桜」

上野公園
江戸時代より桜の名所であった上野の山は、戊辰戦争で大きな被害を受けました。明治政府は当初、この地に学校や病院建設を計画していました。
しかし明治3年(1870)、医学校と病院予定地として上野の山を視察したオランダ人医師アントニウス・ボードウィンが、上野の山の自然を残すことを政府に進言したことで、明治6年(1873)に上野は、浅草、飛鳥山などと共に公園として指定されました。
明治9年(1876)には、上野公園開園式へ明治天皇が行幸されたのにあわせて、付帯設備も整備が進みます。精養軒や八百善など、割烹店や休憩所の開業希望者に土地が貸し出されました。
他の公園の借用料よりもかなり高かったため、店は、庶民を対象としたものではなく、内国勧業博覧会などの国家的行事の開催や、外国要人の接待など、高貴な場所としても利用されました。
錦絵でも、上野の山にある名所や様々な施設とともに、桜を描いた作品が多く制作されました。
「作品 13」では清水堂が、「作品 15」では、精養軒が桜の姿とともに描かれています。

11）古今東京名所
（上）上野黒門口（下）上野公園地石坂
歌川広重(三代)　明治16年(1883)

12）東京滑稽名所　上野摺鉢山　俳優の身振り
歌川広重(三代)　明治16年(1883)

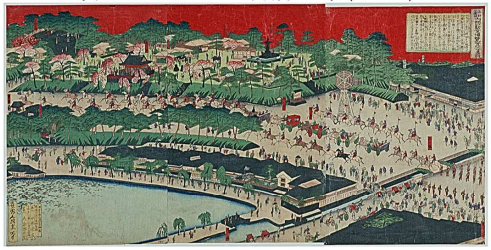
13）東京名所　上野桜満開の図
蕾斎　明治31年(1898)

14）東京上野大仏前全景
薮崎芳次郎　明治22年(1889)

15）東京名所内　上野公園地不忍見晴図
歌川広重(三代)　明治　9年(1876)

博覧会
第二回内国勧業博覧会は明治14年(1881)3月1日から6月30日の期間に開催され、8万人を超える来場者がありました。また明治23年(1890)4月1日から7月31日まで開催された第三回内国勧業博覧会は、来場者が100万人を超えました。
開催期間は桜の開花時期とも重なり、博覧会の風景を描いた作品では桜の姿が取り上げられました。
一方、第一回内国勧業博覧会は、桜の開花時期でない明治10年(1877)8月21日より開催されましたが、作品には桜が描かれています。
開化を代表する博覧会を華やかに見せるため、桜とともに描かれたと考えられます。文明開化の粋を集めた博覧会の会場を彩る桜が、当時の人々の高揚感を表しています。
「作品16」と「作品17」では、第一回内国勧業博覧会が、「作品19」では、第三回内国勧業博覧会の様子が描かれています。

16）上野公園地　博覧会御開業図
年光　明治10年(1877)



17）上野公園地　内国勧業博覧会開業図
年光　明治10年(1877)

18）第二回内国勧業博覧会表口
小林清親　明治14年(1881)

19）上野公園博覧会之図
歌川国政(五代)　明治23年(1890)

「浅草と桜」

浅草寺奥山(本堂の北西一帯)には、享保18年(1733)に大量の桜が植えられました。「千本桜」とも呼ばれたその様子は当時評判を呼び、嘉永6年(1853)には「花屋敷」が誕生しました。
明治時代になり、浅草寺境内一帯が公園となったことから、管理者である東京府に、園内の樹木手入れを申請した記録が残されています。その文書には、当時の浅草公園内の樹木の内訳が記されており、全体で576本の樹木のうち、桜は91本でした。椋の木の210本に次いで多く、全体の約16%をしめていたことが判ります。
浅草寺の五重塔と煉瓦造りの浅草凌雲閣という、江戸と明治を代表する塔と桜の姿は、明治の浅草を代表する名所風景でした。

20）東京名勝浅草観音之図
歌川国輝(三代)　明治25年(1892)

21）東京名所　浅草金竜山遠景新開池之図
井上安治　明治22年(1889)

「向島と桜」

22）東京真画名所図解　向島桜
井上安治　明治14~22年(1881~89)

23）向嶌桜
小林清親　明治13年(1880)

24）東京三絶景　墨堤之桜花
矢島徳三郎　明治23年(1890)

「飛鳥山と桜」

飛鳥山は八代将軍吉宗の命で、元文2年(1737)に本格的な桜の植樹が行われ、王子権現の社地となりますが、この地では鳴り物なども許されていました。江戸の街からすこし離れた郊外の地は、市民の行楽の場として賑わいました。また飛鳥山から日暮里にかけての高台は眺望の景勝地で、高台に連なる寺院では桜や紅葉などを愛でることができました。
明治に公園となった飛鳥山ですが、園内の樹勢は衰え、桜は僅か数十本までに減っていました。その後東京府は、明治13年(1880)に桜楓合計1,000本を植栽しました。その内訳は紅葉300本、八重桜200本、芳野桜(ソメイヨシノ)300本、山桜200本との記録が残っており、ソメイヨシノが桜として最も多く植栽されたことが判ります。

25）東京名勝図会　谷中日暮の里
歌川広重(三代)　年不明

26）東京名勝図会　道灌山
歌川広重(三代)　明治　2年(1869)

27）東京名勝図会　飛鳥山花見
歌川広重(三代)
明治　2年(1869)

「女性と桜」

明治時代になり、身のまわりの品々に開化文物を取り入れたのは、まずは上流階級の人たちからでした。
なかでも女性の姿を開化風俗の題材とする錦絵へ取り上げるとき、その周りには桜の姿が描かれることが数多くありました。